

## 認知言語学と哲学

——言語は誰の何に対する認識の反映か——

酒井 智 宏

跡見学園女子大学

**【要旨】**「言語は人間の世界認識の反映である」という認知言語学的な主張（以下、主張 P）は次の二つの問題を提起する。(i) 人間が何を認識するのか。(ii) 誰が世界を認識するのか。(i) に関して、認知言語学では、外的世界と内的世界の二元論が前提とされる。しかし、認知言語学者が外的世界に関する事実と呼ぶものは、実際にはわれわれが解釈したかぎりでの世界の記述にすぎず、同じことを一元論のもとで述べなおすことができる。それゆえ、認知言語学の二元論は十分に正当化されているとは言えない。(ii) に関して、主張 P を受け入れれば、言語間の変異はすべて話者の世界認識の違いによるという結論に至る。しかし、この結論は逆説的にも「話者の認識から独立した意味」という客観主義的意味観を帰結しうる。かくして、主張 P と対照言語学とのあいだに緊張関係が生じることになる。

**キーワード：**認知言語学, 哲学, 世界, 認識

### 1. はじめに

1990 年代以降、認知言語学はまたたく間に発展を遂げた。

#### 引用 1

ことばとは、要するに人間が世界を認識する手段であると同時に、その認識結果の証拠あかしでもある<sup>1</sup>。この面に焦点を当てる研究が、意外なことにこれまでの言語学では比較的少ない。(鈴木 1990: 3)

<sup>1</sup> この一文は慎重に読まれる必要がある。まず、この文の後半部分からは、「言語は人間の世界認識の結果である」というテーゼが読み取れるように思われる。このテーゼは、「人間は言語なしに世界を認識し、その結果として言語が誕生する」という主張と両立する。ところが、この文の前半からは、「(少なくともある場合には)人間は言語なしに世界を認識することはできない」という(ソシュールの)テーゼが読み取れる。これは後半のテーゼと整合しない。一般に、「XはYの手段であり、かつ結果である」というのは、整合的に読み解くことの難しい主張である。「車は移動の手段であり、かつ結果である」という主張においては後半部分が、「私がここにいることは、移動の手段であり、かつ結果である」という主張においては前半部分が奇妙に響く。ここで鈴木が意図しているのは、「車は移動の手段であり、かつ車がここにあるということは移動の結果である」という形のテーゼであると思われる。すなわち、鈴木は、「(少なくともある場合には)人間は言語なしに世界を認識することはできない」という(ソシュールの)テーゼを支持したうえで、言語のあり方を観察することによって、人間が世界認識のために言語をいかにして用いたかが分かると主張している。鈴木は決して「人間は言語なしに世界を認識し、その結果として言語が誕生する」と言っているわけではない。実際、以下で見るように、認知言語学では、言語が客観的世界を写しとるばかりでなく、それ自体の世界を作り出すことが強調される。

鈴木孝夫のこの発言からおよそ20年が経過するあいだに、Lakoff and Johnson (1980), Langacker (1987, 1991), Lakoff (1987) などが記念碑的著作としての地位を獲得したのにもない、「この面に焦点を当てる研究」が多く見られるようになった。いまでは、言語が「人間が世界を認識する手段であると同時に、その認識結果の証拠あかしでもある」というのは、それ自体が論証を要することがらではなく、むしろ認知言語学の大前提となっている。このことは認知言語学の概説書の導入部分に見られる記述からも確認することができる。たとえば、山梨 (1995, 2000) は言語と認識の関係について次のように言う。

#### 引用 2

外部世界の理解には、われわれの認識が反映されている。またこの認識の過程は、いろいろな形で言葉の世界に反映されている。(山梨 1995: 4)

#### 引用 3

認知言語学のアプローチでは、言語表現を、認知主体から独立した自律的な記号系としてとらえるのではなく、外部世界の主体的な解釈の直接的な反映としてダイナミックにとらえていく。より具体的に言うなら、認知言語学のアプローチでは、日常言語の表現は、ミクロレベルからマクロレベルにいたるどのような要素であれ、主体が外部世界を解釈していく認知プロセスの反映として規定される。(山梨 2000: 11)

こうした言語観は、「言語学の研究対象は、究極的には、言語そのものではなく、人間の心である」という信念につながっていく<sup>2</sup>。

#### 引用 4

言語を探究することは、人間の認識のあり方を尋ねることにほかなりません。(吉村 2004: vi)

言語を探究すれば人間の認識のあり方に迫ることができるという期待が認知言語学の研究の大きな原動力となっていると言ってよいだろう。だが、ここであえてその方に逆らって、愚直に問いたい。「ことばとは、要するに誰が何を認識するための手段で、誰が何を認識した結果の証拠なのか。」この面に焦点を当てる研究が、意外なことにこれまでの言語学では比較的少ない。この論文の目的は、「言語は人間の世界認識の反映である」という認知言語学のテーゼが、無反省に言語分析の(すなわち人間の認識を解明するための)前提とされる前に、その解釈自体が哲学的検討を要するものであることを示すことである<sup>3</sup>。以下、第2節では、言語が何に対す

<sup>2</sup> 心を物理的対象(の状態)に還元する物の一元論の立場に立てば、言語学は究極的には自然科学の一部門となる。言語学が(人文学ではなく)自然科学に属する学問であることは、特に生成文法理論の研究者(たとえば福井 2012)によって強調されることが多い。

<sup>3</sup> 本論文では、鈴木(1990)にならって主として「認識の反映」という言い方を用いるが、これを「(ものや事態の)捉え方の反映」「認知プロセスの反映」などと置き換えても論点に影

る認識を反映したものであるかという問題を手がかりにして、認知言語学の二元論的構図が十分に正当化されていないことを指摘する。第3節では、(言語学の分野では周知の)いくつかの言語現象を取りあげ、そこに反映されているはずの認識を検討することにより、「世界を認識する主体」という概念が空転する可能性があることを論じる。

この論文の目的は、認知言語学の枠組みでなされた言語分析の妥当性を問うことではなく、そうした分析が拠って立つ前提を検討し、その前提を鵜呑みにすることによって隠蔽されてしまった哲学的諸問題を視野の中に回復することである。言語学では、通常、「ある理論的枠組みの評価は、その枠組みのもとですぐれた言語分析がなされる(あるいは実際になされている)かどうかで決まる」という基準が暗黙のうちに採用されている。本論文は、この評価基準を採用せず、あえて認知言語学の基本前提のところ立ち止まり、その哲学的基盤を論じようとするものである。

この目的のため、以下の議論では、これまで認知言語学が挙げてきた研究成果にはふれず(言うまでもないが、これはそうした成果を否定するということではない)、主として認知言語学の立場から書かれた非専門家・初学者向けの文章・教科書類の導入部分を取りあげ、哲学的検討を加えることにする。その中には、ウェブサイト「言語学出版社フォーラム」に掲載されている文章や言語学者によって執筆された外国語教材も含まれる。概説的な文章(とりわけその導入部分)を主たる検討対象とする理由は次の二点である。第一に、専門的な学術論文においては、その学問分野の基本テーゼが主題化することは少なく、そうしたテーゼはむしろ概説的な文章(とりわけその導入部分)において語られることが多いためである。第二に、通常の学術論文が批判的に読まれるべきものであるのに対して、概説的な文章ははじめから正しいものとして読まれることが多く、読者(その多くはこれからこの分野に参入しようとする人たち)に与える影響が大きいと考えられるためである。

## 2. 言語とは何を対象とした認識の反映か——二元論をめぐる問題——

### 2.1. 現実構成主義

認知言語学では、言語を人間の世界認識の反映と捉える。このとき、「客観的な世界」(すなわち外的世界)と「人間の目を通した世界」(すなわち内的世界)の二元論が前提とされる。

#### 引用5

言語がわれわれの経験する世界を構成するというとき、重要なのはどのような捉え方が取られているのかという問題である。言いかえれば、ヒトの生きる世界は「ありのまま」の現実ではなく、認知活動によって構成されたものだということである。[...] 言語の際立った特徴の一つは、「ありのまま」の現実を写

しとるだけでなく、出来事を多様な捉え方のもとに描き出すための手段を備えているという点である。(大堀 2002: 2-3)

#### 引用 6

言語が語る意味の世界は客観的な世界そのものではなく、われわれ人間の目を通した世界です。したがって、言語の意味を考えるときには、人間がものごとをどのように捉え、理解し、判断するかという視点が不可欠となります。

(廣瀬 2007)

#### 引用 7

われわれの世界に対する理解はそれゆえ能動的で、動的で、構成主義的な性質をもつ。このことの根本的に重要な帰結として、言語的意味として想起される概念は不透明であるということが導かれる。すなわち、そうした概念は世界を単純に反映したり、世界に完全に素直に対応したりはしないということである。

(Langacker 2008: 35, 拙訳, 強調は原文による)<sup>4</sup>

大堀 (2002: 2) は、ありのままの世界を人間がさまざまな捉え方 (construal) のもとに再構成するという考え方を現実構成主義 (constructivism) と呼ぶ。現実構成主義自体は特に目新しい考え方ではなく、ロックやコンディヤックの経験主義哲学に見られる唯名論的な考え方を踏襲したものである。たとえば、コンディヤックは、種 (espèce) や属 (genre) は自然の側にあらかじめ存在するのではなく、人間の側の捉え方 (manière de concevoir) によってはじめて形成されると述べている (Condillac 1780: 第 I 部第 IV 章)。この考え方は事物が人間の側の動機と独立にあらかじめ分節されているとするプラトンのイデア論やデカルトの生得観念説と対立するものにはかならない。

現実構成主義に対するもっとも素朴でもっとも痛烈なパンチは、どうして「ヒトの生きる世界は『ありのまま』の現実ではなく、認知活動によって構成されたものだ」と分かるのか、どうして「言語が語る意味の世界は客観的な世界そのものではなく、われわれ人間の目を通した世界」だと分かるのか、と問うことだろう。人間の認識から独立した「ありのままの現実」や「客観的な世界そのもの」をいつ誰が見たと言うのか。人間の認識が届かない世界と人間の認識の内容をいつ誰が比べたと言うのか。これは明らかに不可能な企てであるように思われる。こうした問いを考慮すると、現実構成主義者が「ありのままの現実」「客観的な世界そのもの」と称するものも、実は人間が捉えたかぎりでの世界にすぎないという可能性が浮上してくる。実際、現実構成主義者たちの論述にはこの点に関する混乱が見られる。

<sup>4</sup> ラネカーはまた「『世界』には外的世界とわれわれが構成する心的世界の両方が含まれる」とも述べる (Langacker 2008: 29, n. 2, 拙訳)。

2.2. 「欠如」に関する二元論

引用 8

[現実構成主義]を支持するケースは、言語の様々な側面から挙げられる。例えば、言語には「穴」「跡」「失う」「休む」のように、何かが欠けていることを積極的に表わす語がある。客観的な事実として考えれば、「穴」自体はモノとして存在するわけではない。存在するのは縁取りであり、われわれはそれに囲まれた何もない部分を、あたかも実体があるかのごとく「穴」と捉えているわけである。(大堀 2002: 2)

「穴」を例にとると、大堀はここで次のような図式を前提としている。

表1 大堀 (2002) の「穴」の捉え方

客観的世界 (外的世界)	人間が捉える世界 (内的世界)
何もない部分	穴

しかし、「穴」と呼ばれるのが「客観的な事実として考えれば[...]何もない部分」であるとはどういうことだろうか<sup>5</sup>。そこには、微生物もいるだろうし、空気もあるだろう。客観的世界において矛盾した事態が同時に成立することはないから、「微生物がいる部分」「空気がある部分」「何もない部分」が客観的世界において同時に成立することはありえない。むしろ、これらはいずれも人間の側の捉え方を反映した描写であると考えられる<sup>6</sup>。「穴」が「何もない部分」を指すと言うとき、大堀は、人間が捉えたかぎりでの事実を誤って客観的世界 (外的世界) の事態として解釈してしまっているのである。「穴」という語の存在が示唆するのは、外的世界と内的世界の二元論ではなく、大森 (1981: Ch.20) の言う「重ね描き」にはかならない。すなわち、あるものを「微生物がいる部分」として捉えることも、「何もない部分」として捉えることも、「穴」として捉えることもできるということである<sup>7</sup>。そこで、正しいと思われる図式は次のようになる。

<sup>5</sup> 大堀の論述に関しては、以下に述べる問題以外に、次のような疑問がわく。動物の中には、モグラや猫のように、言語をもたないと考えられるにもかかわらず、われわれが「穴」と呼ぶものに対する選好を示すものが存在する。このとき、大堀は次の選択肢から一つを選ばなければならない。(i) モグラや猫は言語をもち、その言語は「穴」に相当する語をもっている。(ii) 「穴」は言語以前に成立する概念であり、人間による (再) 構成を必要としておらず、それゆえ引用 7 は誤りである。

<sup>6</sup> そこが真空だとしても、そこを「何もない部分」と呼ぶことにすべての物理学者が同意するわけではなく、「真空」の定義は物理学的立場に依存してはじめて定まる。

<sup>7</sup> 大森は、日常描写と科学描写の重ね描きの例として、日常言語が「一滴の血」として描くものを、科学者が「赤血球」「血小板」「ヘモグロビン」「アルブミン」として描く場合を挙げている。

表2 本論文の「穴」の捉え方（暫定版）

客観的世界 (外的世界)	人間の語り方	
α	語り方 1	何もない部分
	語り方 2	微生物がいる部分
	語り方 3	穴

この図式において、「何もない部分」「微生物がいる部分」「穴」は、いずれもわれわれの語り方にすぎず、互いに矛盾することが許される。ある語り方では、人物 X は「すぐれた選手」であり、別の語り方では、人物 X は「未熟な選手」である。第一の語り方が高校野球を語る語り方であり、第二の語り方がプロ野球を語る語り方であるならば、これらの語り方のどこにも矛盾はない。

外的世界と内的世界を混同する誤りは、引用 8 における「休む」の捉え方にも見られる。大堀は「休む」が「何かが欠けていることを積極的に表わす語」であると言う。だが、いったい何が欠けていると言うのか。「働くこと」や「活動すること」が欠けているのだろうか。いや、それを言うなら、「働くこと」や「活動すること」にも、「休むこと」が欠けているではないか。その証拠に、「休みなしに働く」などと言うことができる。一般に、A と B が反意語の関係にあるとき、概念 A には概念 B が欠けており、概念 B には概念 A が欠けている。大きいものは小さくなく、小さいものは大きくないのである。それゆえ、「休む」が「何かが欠けていることを積極的に表わす語」であるのに対して、「働く」や「活動する」が「何かが欠けていることを積極的に表わす語」でないと言えるためには、「休む」「働く」に関する特殊な捉え方が要請される。われわれは、休んでいるときにもたくさんのことをしている。呼吸し、発汗し、まばたきをし、あくびをする。眠っていれば、夢を見、いびきをかき、寝返りをうつかもしれない。そのほかにもいろいろすることはあるだろう。それにもかかわらず、われわれは、「この前の日曜日は何をしましたか」と聞かれて、「何もませんでした」と答えることがある。このとき、われわれは、呼吸、発汗、まばたき、あくび、夢、いびき、寝返りなどを考慮に入れていない。なぜか。それは、これらが生理現象として捉えられているからにほかならない。この「何もませんでした」という返答には、人間の為すことのうち、意図的行為のみが行為であり、生理現象は行為ではないという捉え方が反映されている<sup>8</sup>。

以上から、大堀が、「穴」と「休む」に関して、それぞれ二重の誤りを犯している可能性があることが分かる。第一に、「微生物がいる」「呼吸する」etc. という事

<sup>8</sup> 「何もしなかった」と捉えられる行為は生理現象に限られない。たとえば、休日に一日中ゴルフをしていた場合にも、「昨日は何もしなかった。今日からがんばらなければ」などと言える。ここでは、大きな努力ないし忍耐を伴わない行為（娯楽）と、大きな努力ないし忍耐を伴う行為（仕事）のうち、後者のみが行為として捉えられている。本文の例とこの例を考えあわせると、もっとも狭義の行為とは、意図的に為され、かつ相応の努力と忍耐を伴うものであることが分かる。

実が成立しているにもかかわらず、これらを「何もない」「何もしていない」状態として捉えている。第二に、「何もない」「何もしていない」が人間の側の捉え方であるにもかかわらず、これらを外的世界において成立する事実として捉えている。われわれは、「科学とはありのままの現実を捉える営みである」といったテーゼを無批判のうちに受け入れ、科学的に捉えられた世界を外的・客観的世界とみなし、非科学的に捉えられた世界を内的・主観的世界と捉える傾向がある。しかし、「人間による捉え方」という観点を徹底するならば、人間は客観的世界（外的世界）を捉えることはできないはずである。捉えてしまったら、それはその瞬間に人間が捉えた世界（内的世界）になってしまうからである。この観点に立つならば、科学的に記述された世界でさえ、「科学的に捉えられた世界」にすぎない。人間が認知能力によって外的世界を捉え、独自の内的世界を作り上げるという二元論の図式は、認知言語学が想定するほど容易には成り立たないのである。実際、大森（1981: Ch. 20）が「日常描写と科学描写の重ね描き」を提案したのは、まさしくそうした二元論を拒絶するためであった。「こうして二元論的構図での客観的世界とその主観的世界像は、一元論的構図の中では日常的描写と科学的描写の『重ね描き』として表現される。」（大森 1981: 243）

一元論を徹底するならば、上の表2ではなお不十分である。表2の $\alpha$ とは何だろうか。これが客観的世界の側に属するかぎり、あいかわらず「客観的世界に存在する $\alpha$ を人間が……として捉える」という二元論が成立してしまう。だが、この $\alpha$ と称されるものは、まさしく「同じ部分 $\alpha$ 」などと呼ぶことによって、人間が捉えたものにほかならない。したがって、正しい図式は表3となる。

表3 本論文の「穴」の捉え方

語り方4：同じ部分 $\alpha$	語り方1：何もない部分
	語り方2：微生物がいる部分
	語り方3：穴

この表では、外的世界と内的世界の区別は完全に消失している。この表が示すのは、「人間の捉え方から独立した客観的状況 $\alpha$ があって、それを人間が語り方1・2・3によって捉える」のではなく、「語り方1・2・3をまとめて『同じ部分』と捉えることができるという事実によってはじめて $\alpha$ という概念が生まれる」ということである（cf. 野矢 1995/2012: Ch. 1）。

### 2.3. 推論に関する二元論

科学的描写を客観的世界に属する事実とみなす誤りは、廣瀬(2007)にも見られる。

## 引用 9 (引用 6 のつづき)

たとえば、具体的な状況を思い描かない場合、われわれは任意の二つの個体 A、B に関して、「A が B の上にあれば、B は A の下にある」や「A が B の近くにあれば、B も A の近くにある」という推論が論理的に妥当であると考えます。ところが実際の言語使用では、このような推論は成り立ちません。日英語ともに、「辞書は机の上にある」(The dictionary is on the desk) や「自転車は僕の家の上に近くにある」(The bicycle is near my house) は自然な表現ですが、「机は辞書の下にある」(The desk is under the dictionary) や「僕の家は自転車の近くに近くにある」(My house is near the bicycle) は非常に不自然な表現になります。これは、人間の空間認知における非対称性という性質から説明されるものです。つまり、われわれの空間表現では、より動きやすいと捉えられるものを、より動きにくいと捉えられるものとの関係で位置づけるのであって、その逆ではないということです。[...]このような観点から言語の意味を深く考えていくことによって、「言語は精神を映す鏡である」ということが実感できるようになってきます。

(廣瀬 2007)

廣瀬は、引用 6 で「客観的な世界そのもの」と「言語が語る意味の世界=われわれ人間の目を通した世界」を混同しないように警鐘を鳴らし、両者の峻別が必要となる場合として、引用 9 で位置関係に関わる推論の例を挙げている。これを図示すると表 4 のようになる。

表 4 廣瀬 (2007) の推論の捉え方

客観的世界	人間が捉える世界 (内的世界) = 実際の言語使用
「A は B の上にある」→ 「B は A の下にある」 という推論が成り立つ。	「辞書は机の上にある」→ 「机は辞書の下にある」 という推論は成り立たない。

しかし、これは奇妙である。「A が B の上にあれば、B は A の下にある」や「A が B の近くにあれば、B も A の近くにある」といった推論も、「実際の言語使用」であることに変わりはない。さもないければ、A や B といった定数ないし変数を用いた数学や科学の営みが「実際の言語活動」ではないという奇妙なことになってしまう。世界の側に、A や B なるものがあらかじめ存在しているわけではない。あるものを「辞書」として捉えるのも、より一般化・抽象化して「A」として捉えるのも、われわれの「実際の言語使用」にほかならない。

そもそも、「A が B の上にあれば、B は A の下にある」や「A が B の近くにあれば、B も A の近くにある」といった命題は、人間の捉え方と独立に客観的に成り立つわけではない。これを一つの事態として捉えるためには、対象を一般化して A



やBとして捉える認知活動のほかに、「上」「下」「近く」といった概念が必要とされる。人間の認知活動と独立にこれらの概念が成立しているという考え方こそ、まさしく認知言語学が否定するものである (cf. 井上 1998, 今井 2010)。ここで描かれているのは、客観的世界と主観的世界の対立などではなく、あるものを数学・自然科学の言語のもとで「A」「B」として捉えることも、日常言語のもとで「辞書」「机」としても捉えることができ、前者の捉え方のもとで成り立つ推論が、後者の捉え方のもとでは成り立ちにくくなるということにすぎない。「ある推論が、数学的・自然科学的な語り方において成り立ついっぽうで、日常的な語り方においては成り立ちにくくなる」という事実の全体が、われわれの「実際の言語使用」の記述なのである。

表5 本論文の推論の捉え方

両者を貫く語り方： 同じ状況 $\beta$	数学的・自然科学的な語り方： 「AはBの上にある」→ 「BはAの下にある」 という推論が成り立つ。
	日常的な語り方： 「辞書は机の上にある」→ 「机は辞書の下にある」 という推論は成り立たない。

われわれは、日常的描写によって捉えたものを、数学的・自然科学的に捉えなおすこともできる。そして、それぞれの捉え方に応じて、そこで展開される推論も異なったものとなりうる。廣瀬の挙げる例は、そうした日常的描写と科学的描写の重ね描きの例にすぎず、外的世界と内的世界の二元論をいささかも正当化するものではない。

本論文では、認知言語学的な二元論の妥当性についてはこれ以上論じないが、仮にこの二元論が正当化されえない立場であるならば、それに応じて「言語は人間の世界認識の反映である」というテーゼも意味をなさないものとなる。

### 3. 言語とは誰の認識の反映か

#### 3.1. 母語話者と言語の慣習的側面をめぐる問題

言語とは誰の認識の反映か。すぐに思いつく答えは「母語話者」というものだろう。一般に、言語Lの母語話者とは、言語Lを母語として使用している人たちのことである。そこで、認知言語学の立場では、言語Lには言語Lを母語として使用している人たちの認識が反映されていることになる。たとえば、日本語という言語には、現に日本語を母語として使用している人たちの認識が反映されていることになる。しかし、言語に慣習という側面があることを見落としてはならない。

## 引用 10

1つの言語のなかには似たような意味を表す語彙や構文が数多くあるが、これらは同じような状況をさまざまな立場から捉え、概念化しようとしてきた話者たちの歴史的営みの慣習化した結晶である。(野村 2003: 45)

たとえば、{下駄/筆}を入れることがなくなっても、{下駄箱/筆箱}が{下駄箱/筆箱}と呼ばれ続けるのは、言語の慣習的側面の現れの一つである<sup>9</sup>。

言語の慣習的側面と認知言語学のテーゼとのあいだには緊張関係があるように思われる。言語の慣習的側面を考慮に入れるならば、「言語Lには言語Lを母語として使用している人たちの認識が反映されている」というのはおおざっぱな言い方にすぎず、より厳密には「言語Lの表現Eには、表現Eが発生した時点で言語Lを母語として使用していた人たちの認識が反映されている」と言わなければならない。この立場のもとで「言語は人間の世界認識の反映である」というテーゼを検証しようとするならば、それぞれの言語表現が発生した時点における母語話者の認識を検証する必要がある。しかし、これは困難を極める作業となるだろう。仮に祖語までさかのぼるならば、文献資料も残っていない以上、母語話者の世界認識はおろか、その母語話者が用いていた言語に関する事実すら推測の域を出なくなる。それゆえ、言語の慣習的側面に注目するかぎり、「言語は人間の世界認識の反映である」というテーゼは、反証可能性を決定的に欠いており、思弁の対象とはなりえても、科学的探求の対象とはなりえない。それにもかかわらず、「言語は人間の世界認識の反映である」というテーゼは、答えのない思弁に言語学者を駆り立てる規範的力として機能し、「なぜ言語Lには表現Eがあるのか？」と問われれば、表現Eを生んだ認知的要因を特定しなければならないと感じさせてしまう。「なぜ？」という問いに答えることが科学者たる言語学者の仕事だと言われることがあるが、「なぜ言語Lには表現Eがあるのか？」という問いに対して「それは答えなければならない問いなのか？」と問い返すのはけっして怠慢ではないのである。

遠い昔の話者たちの世界認識を解明することができるかという実際上の問題とは別に、ここには理念上の問題がある。「言語Lの表現Eには、表現Eが発生した時点で言語Lを母語として使用していた人たちの認識が反映されている」と考えるかぎり、(新造語などの場合を除き)現在の言語をいくら研究しても、現在の人間の認識については何も分からない。それゆえ、引用2・5・6に登場する「われわれ」には、奇妙なことに、書き手自身は含まれないことになる。仮に「言語は人間の世界認識の反映である」というテーゼが正しいとしても、言語には、これらの書き手より(はるか)前の世代の人間たちの認識が反映されているにすぎない<sup>10</sup>。

<sup>9</sup> より事実に即した{靴箱/ペンケース}という呼び名もあるが、ここでは、「過去においては事実に即していたが、現在においては事実に即していない呼び名」が現在においても用いられているということが重要である。

<sup>10</sup> この議論はあくまでも言語の慣習的側面と認知言語学のテーゼとのあいだに緊張関係があ

問題はそれだけではない。いつの時代の人間であれ、言語に人間の認識が反映されているという考え方を疑わしいものにする事例が存在する。そうした事例を次節以下で見ることになろう。

### 3.2. 認知言語学と対照言語学との緊張関係

対照言語学に対して認知言語学からのアプローチが行われることはめずらしくない（池上 1991: Ch. 2, 西村 1998, 2000）。しかし、認知言語学と対照言語学とのあいだには緊張関係があるように思われる。影山（1999）による認知言語学の解説を見てみよう。

#### 引用 11

外界の情報を脳に取り込む際に言語学として重要なのは、外界情報を純粋に物理的な性質としてではなく、あくまで、その言語社会におけるものの見方[...]を通してということである。簡単な例で言えば、輝く太陽の光は物理的には或る波長に分析できるが、日本人が見ると（あるいは日本語の決まった表現としては）太陽は「赤い」と言い、他方、アメリカ人はオレンジ色あるいは金色と表現する。（影山 1999: 23）

日本語と英語とで太陽を形容する色彩語が異なることは否定しえない事実である。では、そこから、日本語話者と英語話者が太陽の色を異なる色として認識しているという結論を導いてよいだろうか<sup>11</sup>。ここには飛躍があるように思われる。この論法に従うと、たとえばフランス語話者と日本語話者は茶封筒（フランス語 *enveloppe jaune*, 字義どおりには「黄封筒」）の色を異なる色として認識しており（cf. 鈴木 1990）、古代ギリシャ人は色弱で（cf. Deutscher 2010: Ch. 1）、日本語話者は青信号や青々と茂った草を緑として認識していないことになってしまう<sup>12</sup>。ここから、「日本語には単複の区別がないから、日本語の母語話者は一つの机と複数の机の違

---

ることを示すものであり、言語の慣習的側面に着目する言語学自体が不可能であることを示すものではない。たとえば、「下駄を履く人が少なくなった」という命題は「下駄箱」という表現に関する事実とは独立に検証可能であるから、「下駄を履く人が少なくなったにもかかわらず、依然として『下駄箱』という語が一般的に使われている」という記述を行うことになら問題はない。

<sup>11</sup> 引用 11 において、「日本人が見ると」の他に「言語社会におけるものの見方」が出てくることに注意しよう。ここにおいて、影山は、「日本人とアメリカ人は太陽を異なった色として認識している」というテーゼに与するのを慎重に避け、「日本社会とアメリカ社会は太陽を異なった色として捉えている」という社会文化論的テーゼを適用しようとしたのではないかと推察される。しかし、「社会が捉える」という言い方はメトニミーにすぎず、実際には社会の構成員たる人間が捉えるのであるから、この社会文化論的テーゼは依然として本節の批判の範囲内にある。

<sup>12</sup> 「日本語にはもともと『緑』にあたる語がなかった」といった説明も認知言語学にとって有利にはたらかないことに注意しよう。この説明と両立する認知言語学的な命題は、「かつての日本語話者は青と緑の違いを認識していなかったため、日本語には『緑』にあたる語がなかった」というものでしかない。

いを認識していない」といった極論まではもう一歩である<sup>13</sup>。

影山もそれに気づいているようで、急に歯切れが悪くなる。

#### 引用 12 (引用 11 の続き)

おそらく物理的な認識の仕方そのものは日本人とアメリカ人でさほど違わないが、言語の表現としては違いが出てくる。(ibid.)

引用 12 では、引用 11 で対立関係にあったはずの「物理的」と「認識」(=引用 11 では「ものの見方」)が組み合わせられ、「物理的な認識の仕方そのもの」と言われている。しかし、引用 11 が正しければ、対象の認識は対象の物理的性質とは異なる次元に属するから、「物理的な認識の仕方そのもの」というのは矛盾した概念でしかない。

仮にこの点に目をつむり、引用 12 こそが正しいと考えても、新たな問題が発生する。認識が違わないのに表現が違うとしたら、その表現の違いを生み出す要因は何か。少なくとも、その要因がもはや引用 11 にある「ものの見方」でないことは確かである。こうして、影山は、「ものの見方」を反映していない言語表現の存在を認めざるをえなくなり、「言語は人間の世界認識の反映である」というテーゼは反証されてしまう。実のところ、この混乱は、引用 11 における「(あるいは日本語の決まった表現では)」という言い換えの中にも示されている。「決まった表現」という表現からは、「実際に X だと認識しているわけではないが、表現としては X に相当する表現を用いる」という考え方が背後にあることが分かる。

Taylor (2003: Ch. 1) も述べるように、色彩語彙は認知言語学的説明が有効に機能するとされる現象の代表例であり、理論の妥当性を検証するための試金石とされている。影山 (1999) が認知言語学的な考え方を解説するために色彩語の例をもちだしたのも、こうした事情をふまえてのことだろう。ところが、色彩語の用法が言語間で異なるという平凡な事実と「言語は人間の世界認識の反映である」というテーゼとのあいだには緊張関係があるのである。

認知言語学が得意とするはずの領域でむしろその弱点が露呈するのは、色彩語の場合にかぎらない。認知言語学は、同一の場面に対して言語間で異なる表現形式が用いられるという事実を、それらの表現形式の背後にある人間の事態把握 (construal) の違い (非真理条件的意味の違い) により説明してきた (cf. 西村 2000)。この点で、認知言語学における対照言語学は、井元 (2010) の言う「現象面での対比」を超えて、真の説明を志向するものだと言えるだろう。

<sup>13</sup> この問題は、認識が先か言語が先かという問題とは独立である。認識の結果として言語が発生するという考え方によれば、太陽を赤と形容する言語の話者とオレンジと形容する言語の話者とは、言語以前の認識に違いがあったことになる。言語が認識を作り出すという考え方によれば、太陽を赤と形容する言語とオレンジと形容する言語が発生したその日に、太陽に対して異なる認識をする人間が生まれたことになる。

## 引用 13

対照研究はともすれば、たんなる図式の適応 [ママ<sup>14</sup>] に終わり、A の言語ではこうになっているが、B の言語ではこうである。A の言語の過去形の方が B の言語より守備範囲が広い、といったような現象面での対比に終始しがちである。

(井元 2010: 256)

しかし、認知言語学のこの志向が空回りする場合がある。

- (1) a. 英語 : It rains.  
 b. フランス語 : Il pleut.  
 c. イタリア語 : Piove.

降雨を表す文において、英語では it が用いられるのに対して、イタリア語では主語は表現されない。フランス語では英語と同様に il が用いられるが、英語と異なり、この il は指示代名詞 ça と競合関係にある (\*That rains / Ça pleut.)。それゆえ、英語の it とフランス語の il はソシュールの言う意味での価値が異なることになる。異なる言語形式が異なる世界認識の反映であるならば、(1a), (1b), (1c) は意味 (捉え方) が異なるはずであるが、Ruwet (1991: 90) が述べるように、どんなにがんばっても、(1a), (1b), (1c) のあいだに意味の違いは見出せない。それでもなお、認知言語学は、(1a), (1b), (1c) を記述する際に「降雨という同一の事態に対して異なる認識を行う主体」の存在を要請するのである。

直接目的語代名詞に関しても、英語・フランス語・イタリア語の表現形式に違いが見られる。これらの言語において、補文動詞の直接目的語代名詞の可能な位置は以下に示す位置にかぎられる。

- (2) a. 英語 : John wants to eat it.  
 b. フランス語 : Jean veut le manger.  
           Jean want.3SG OBJ.3SG eat.INF  
           'Jean wants to eat it.'  
 c. イタリア語 : Gianni vuole mangiar-lo.  
           Gianni want.3SG eat.INF-OBJ.3SG  
           Gianni lo vuole mangiare.  
           Gianni OBJ.3SG want.3SG eat.INF  
           'Gianni wants to eat it.'

英語では直接目的語代名詞が独立の語であるのに対して、フランス語とイタリア語では代名詞は接辞化する。フランス語では接辞代名詞が補文動詞の前に付加されるのに対して、イタリア語では接辞代名詞は補文動詞の後か、主文動詞の前に付加される。異なる言語形式が異なる世界認識の反映であるならば、(2a), (2b), (2c)

<sup>14</sup> この表現は同書に多数出てくるが、「適用」が正しいと思われる。

は互いに意味が異なるはずであるが、やはりそこには意味の違いは見出せない (cf. 守田 2013)。また、18 世紀以前のフランス語では、イタリア語のように接辞代名詞を主文動詞に付加することが可能であった。異なる言語形式が異なる世界認識の反映であるならば、フランス語が現在の語順になったときに、フランス語話者の世界認識がなんらかの形で変化したことになるが、この結論を素直に受け入れられる人がどれくらいいるだろうか。そもそも、これが検証に値する仮説であるかどうかすら疑わしい。そのほか、「(「真理条件的」には等価であるにも関わらず)、表現対象である状況の捉え方が異なるがゆえに、意味上対立する表現であり、両者の文法構造の相違はそうした意味の差異を反映するものであると考えることができる」(西村 2000: 150) という説明が空転するように感じられるケースは枚挙に暇がない (cf. Deutscher 2010: Ch. 6)。

次節以下では、この問題を「言語は人間の世界認識の反映である」というテーゼと両立可能な形で回避する可能性を検討してみよう。

### 3.3. 一人称權威の剥奪

前節の議論に対して、次のように強弁することができるかもしれない。「英語話者が太陽に対して orange という語を適用するかぎりにおいて英語話者は太陽を orange と認識しており、日本語話者が太陽に赤という語を適用するかぎりにおいて日本語話者は太陽を赤と認識している。(1) と (2) に見られる形式の違いには英語話者・フランス語話者・イタリア語話者のそれぞれ『雨が降る』『ジョンがそれを食べる』という事態に関する認識の違いが反映されている。それがいかなる認識の違いであるかは分からないが、われわれの直観がどうであれ、とにかく言語形式は認識を直接的に反映しているのだ。」この考え方を採用すれば、Ruwet (1991: Ch. 3) の「どうがんばっても (1a), (1b), (1c) のあいだに意味の違いは感じられない」という訴えに対して、「あなたに (そして私にも) 意味の違いが感じられなくても、意味が異なるのだ」と応じ、言語使用者の一人称權威<sup>15</sup>を剥奪することが可能になる。

一人称權威の剥奪につながる可能性のある認知言語学者の言説としては次のようなものがある。

#### 引用 14

私たちは「ことばは液体だ」と思っている証拠らしきものがかなりあるので。日本語では、「秘密が漏れる」、「噂が流れる」、「流れるような話し方」(流暢な話し方)、「よどみなく話す」、など普通は液体についていう語彙がことばを主語にしています [ママ]。つまり、これは先ほど触れた Lakoff & Johnson

<sup>15</sup> 一般に、「私が Q だと言うのだから、まちがいない」という論法が成り立つとき、Q は一人称權威 (first person authority) をもつと言われる (cf. 野矢 1999: 85-86/2010(I): 103)。典型的に一人称權威をもつとされるのは感覚であり、通常、「さっきから頭が痛い」「急に眠くなってきた」と言う人に向かって、「いや、あなたは頭が痛くなどない」「いや、あなたは眠くなどなっていない」と言う権利はない。

[(1980)]が書いていることですが、私たちの頭の中にはさまざまな『深層の比喩』(Conceptual [ママ] Metaphor) がつまっているようです。村上[春樹]さんをはじめ、作家たちはそれをそれとは知らずに一見新鮮に見える表現をしているのにすぎないのです。(牧野 2006)

### 引用 15

Q-1 心的な「概念」は検証できないのではないですか。

A 語句などの実際の使用場面を観察することによって、「概念」に迫ることができます。(Taylor 2002: 邦訳 31 ページ)

牧野 (2006) は、引用 14 において、村上春樹を含む作家たちの一人称権威を剥奪し、彼らの言語使用に関する事実のみに基づいて、彼らに「ことばは液体だ」という深層の比喩を帰属させている。Taylor (2002) は、引用 15 およびそれに続く議論で、Wittgenstein (1953) による意味の使用説を退け、語の使用には言語使用者がもつ心的な概念が反映されていると主張している。この考え方のもとでは、太陽に赤という語を適用する人は太陽を赤いものとして概念化していることになるだろう。

言語使用者の一人称特権を剥奪し、言語形式の違いからただちに認識の違いを導く言説は、言語学者の書いた外国語教材にも顔を覗かせる。清野・治山 (2013) を見てみよう。まず、清野は、(3) におけるドイツ語の前置詞 *zu* と *bei* がいずれもフランス語では前置詞 *chez* で表されることに着目する<sup>16</sup>。

- (3) a. Ich gehe zu ihr.  
I go ZU her  
'I go to her.'
- b. Ich bin bei ihr.  
I am BEI her  
'I am at her house.'
- (4) a. Je vais chez elle.  
I go CHEZ her  
'I go to her.'
- b. Je suis chez elle.  
I am CHEZ her  
'I am at her house.'

そして、清野は治山に次のように問いかける。

### 引用 16

[...] この場合フランス語では両方とも [...] *chez* を使いますね。フランス語は「静止」と「移動」を区別しようと思わないのでしょうか。事態の捉え方の認

<sup>16</sup> 清野・治山 (2013) の例文にグロスと英訳を追加した。

知的基盤のようなものが違うようですね。この点を解説してもらえませんか？  
(清野・治山 2013: 70)

素直に見れば、(3) と (4) は互いに直訳の関係にあり、そこに意味の違いは感じられない。それでも清野は、ドイツ語話者とフランス語話者とは「事態の捉え方の認知的基盤のようなものが違うようですね」と問いかけている。こうした論法が可能になれば、言語使用者の直観がどうあれ、言語現象から認識を一義的に定義することが可能になり、前節で見たような問題は解消されることになるだろう。

しかし、この論法には二つの問題がある。第一に、この論法はただちに自家撞着に陥る。この論法に従えば、(5a) のように言う人は、自動的に青信号を青と認識していると判断されるだろう。ところが、この同じ人が (5b) のように言えば、その人は青信号を緑と認識していると判断されてしまう。いったい、(5a) と (5b) はこの言語使用者のいかなる認識を反映した表現なのか。

- (5) a. 信号が青に変わった。  
b. 青信号は本当は緑だ。

第二に、この論法は「人間の認識から独立した意味」という認知言語学と正反対の意味観に帰着する。この論法によると、(1) と (2) には、英語話者・フランス語話者・イタリア語話者の同一事態に対する捉え方の違いが反映されている。しかし、いままさに、それがどんな捉え方の違いなのかが分からないから困っているのである。だとすると、そこには「人間によって捉えることのできない（あるいは人間の捉え方とは独立の）捉え方」という意味不明な概念が想定されることになる。これを「理想化された言語使用者だけが捉えることのできる捉え方」などと体よく言い換えることはできるかもしれないが、「理想化された言語使用者」が実在しない以上、「理想化された言語使用者だけが捉えることのできる捉え方」もまた実在性を欠くことになる。

こうした考え方は、問題を解決するものではなく、むしろ「まったく理解不可能なのに、どうしてそこに異なる捉え方があると分かるのか」という新たな問題を提起する。これは「まったく解釈（翻訳）不可能なのに、どうしてそれが言語だと分かるのか」という Davidson (1984: Ch. 9) の議論と類比的である。野矢 (2011: 142) は言う。「『タコが足をくねらせているが、あれは実は手話なんだ。意味はさっぱり分からない。でも言語なのだ』などと言われても、何をおっしゃいますやら、という気持ちになるだろう。』これにならって、次のように言うことができる。「『(1a), (1b), (1c) および (2a), (2b), (2c) は異なる語の配列からなっているが、これらは実は捉え方の違いの反映なんだ。それがどんな捉え方なのかはさっぱり分からない。でもそこには捉え方の違いがあるのだ』などと言われても、何をおっしゃいますやら、という気持ちになるだろう。』



### 3.4. パラメータ

井元 (2010) は、意味に関する言語間変異を、生成文法理論における「原理とパラメータのアプローチ」に準ずる手法で説明することを提案している。

#### 引用 17 (引用 13 の続き)

しかしながら、理想的な対照研究は生成文法が「原理とパラメータのアプローチ」で志向しているように、様々な多様性や差異を生むより抽象的な原理を発見し、その原理におけるパラメータの違いとして差異が説明されるようなものでありたい。(井元 2010: 256)

太陽の色の表現が言語によって異なるという事実を「説明」するための「より抽象的な原理」として、「太陽の色パラメータ」のようなものがあるでしょう。このパラメータに関して、たとえば日本語と英語はそれぞれ [+赤], [+オレンジ] という値を選択することになる。

このシナリオに二つの難点がある。第一に、このパラメータの可能な値のリストはどのようにして定義されるのだろうか。各言語において太陽の色を表す語を集めることによるほかないだろう。だとすると、このパラメータは、たんに各言語で実際に用いられている表現を並べただけのものでしかなく、「より抽象的な原理」などではありえない。第二に、このパラメータに関して、日本語と英語が異なる値の選択を行うという事実はいったいいかなる動機づけに基づいているのだろうか。異なる選択が異なる認知的動機づけに基づいているならば、再び日本語話者と英語話者が太陽の色を異なる色として認識しているという結論に至ってしまう。他方、異なる選択が異なる認知的動機づけに基づいていないならば、日本語と英語の表現は、人間の認識を反映しておらず、たまたまそう決まっているということになり、「言語表現は人間の世界認識の反映である」というテーゼは反証される。かくして、3.2 節のジレンマは解決しない。

同様に、(1), (2), (3), (4) に見られる表現の違いを生み出すための「より抽象的な原理」としてパラメータなるものもちだしたところで、その値の選択の違いの動機づけが明らかにされないかぎり、あいかわらず「人間によって捉えることのできない(あるいは人間の捉え方とは独立の)捉え方」の呪縛からは逃れられない。

### 3.5. 「認識」の再定義

前節のような問題は、「言語は人間の世界認識の反映である」というテーゼにおける「認識」を狭い意味で解釈するから生じるのであり、この語を広い意味で解釈すれば、異なる色認識という問題から逃れることができる、と考えることができるかもしれない。たとえば Lee (2001: 邦訳 2 ページ) は、「ある場面に対して異なる言語形式が選択されていれば、それは異なる概念化なのである」と述べた後に、概念化(ものの捉え方)にかかわる要因として視点/パースペクティブ、前景化、メタファー、フレームの四つを挙げている。確かに、この四つの要因を考慮すれば、

概念化を狭義の認識と同一視しなくてすむだろう。

しかし、これらは目下の問題にはあまり役立ちそうにない。太陽の色を表す表現、降雨を表す文 (1)、直接目的語を代名詞化した文 (2) のいずれも文字どおりの意味を表しており、メタファーは関与していない。また、同一の状況で同一の視点に立っても、(1) や (2) に見られるような差異は生まれるから、視点/パースペクティブも関係なさそうである。同様に、フレームもおそらく無関係と判断される。前景化はどうか。たとえば太陽を前景化すれば赤になり、背景化すれば金色や黄色になるといったことであるならば、同一言語内でも太陽の色にさまざまな表現が見られるはずであるが、実際にはそのようなことはない。「青信号」は前景化しようが背景化しようが「青」と呼ばれるのである。同様に、(1) や (2) においては、表現されている事態の一部を前景化しようとして背景化しようとして、それ以外の言い方がない（たとえば英語の *It rains.* の *it* が消えたり、*John wants to eat it.* の *it* が接辞化して動詞の前に付加されたりはしない）のであるから、これもまた無関係であると考えられる。

### 3.6. 「文化」

池上 (2003) は、言語間変異が「例えば文化的な要因」により生じると言う。

#### 引用 18

一方では人間の認知能力—しかも基本的な働きに関しては、言語の違いを越えて共通に保有されていると想定される認知能力—によって動機づけられるという限りで、人間の言語には言語間での変差があるにせよ、その変差の幅は自ずから一定の範囲内のものとなろう。ただ、その一定の範囲内での可能な選択肢の中で個々の言語によってどれが採られるかということになれば、例えば文化的な要因によって異なる選択がなされるということもあり得よう。

(池上 2003: viii-ix)

ここで言われている「文化的な要因」は、明確に定義されることなく認知言語学者の言説にしばしば顔を出す。李 (2010) は、「[ 認知言語学は ] その一貫した主張として言葉は認知の反映である [...] という立場で、研究を進めてきた」(李 2010: 14) 「言語能力は一般的な認知能力の反映であるため、人間の認知能力の問題に言及せず、言葉の問題を正当に扱うことはできない」(ibid.) と述べた後で、次のように言う。

#### 引用 19

認知言語学では言語的慣習化の背後にある「動機づけ」を重視する。つまり、個々の語彙や構文に関わる言語的慣習には、そのような言い回しになった理由が存在すると見ており、恣意性の議論とは別方向からアプローチしている。その理由たる「動機づけ」の中身は言語的な要素に限らず、社会的、文化的、認知的要素を含むものとして考えている。

(李 2010: 15-16)

最初は言語現象を認知によって説明するのが認知言語学だと言われていたのに、引用 19 では、言語現象を認知ではなく言語、社会、文化によって説明してもよいと言われる。だが、言語現象を言語、社会、文化的要因によって説明するとは何をすることなのだろうか。このアプローチのもとでは、「(1) や (2) に見られる英語・フランス語・イタリア語の代名詞のふるまいの違いは、社会的・文化的要因によって説明される」ということになるが、これではいったいなんのことだか分からない。

よく分からない社会や文化といったものを引き合いに出すことは、「認知で説明のつかない場合（具体的には、太陽の色や (1) と (2) で表される場面のように、各言語の話者に異なる認識を帰すことが荒唐無稽に思える場合）は、社会や文化の違いということにしよう」という態度につながりかねない。これでは、かつて「語用論」がそうであったように、「社会」や「文化」が言語学のゴミ箱になってしまう。

### 3.7. 概念化能力と言語体系の区別

前節までの問題を回避するための議論として、概念化能力が同じであってもそこから生まれる言語体系は異なりうる、とするものがある (Lakoff 1987, 西村 2013)。Lakoff (1987: Ch. 18) は、経験の違いにより、同一の概念化能力が言語体系の違いを生み出すと言う。ここで言われている「経験」とは、前節でふれた「社会」「文化」に多少なりとも具体性を与えたものと解釈することができるだろう。この議論は、Davidson (1984: 邦訳 195 ページ) の「われわれの言語で言語として解釈できない活動形態は発話行動ではない」という主張を超克し、「翻訳が不可能であるということから、理解が不可能であるということが出てくるわけではない」という主張を可能にするきわめて重要なものである。概念化能力があるかぎり、われわれは翻訳不可能な概念体系（すなわち言語体系）であっても理解することができる。それゆえ、概念の理解を論じる際には、「翻訳」による理解だけでなく、「習得」による理解も考慮しなければならない (野矢 2011: Ch. 9)。

では、この議論は目下の問題を解決してくれるだろうか。太陽の色の言語間変異については、これを経験の違いに還元することにより、話者のあいだの色認識の違いを想定しなくてもすむ可能性がある。たとえば、なんらかの経験の違いにより、日本人は赤く染まる朝日や夕日の色を太陽の色の代表例とみなしたのに対して、英米人は黄色っぽく輝く昼の太陽の色を太陽の色の代表例とみなした、といった筋書きを考えてみるができるかもしれない。このような筋書きは、太陽の色についての言語事実を、リンゴの色をめぐる言語事実と同列に扱う道を拓く。鈴木 (1990) の指摘するように、リンゴは日本語では赤であるが、フランス語では緑 (vert) である。しかし、これは日本とフランスで代表的なリンゴの品種が異なるという事実の反映にすぎず、けっして日本語話者とフランス語話者がリンゴを異なる色として認識しているわけではない。日本語話者にとっても、青リンゴは赤ではなく緑 (青ではない) なのである。同様に、日本語話者にとっても昼間の太陽は黄色であり、英米人にとっても朝日や夕日は赤 (red) である。ただ、どちらを代表的な色とみ

なすかに関して慣習的な相違があるにすぎない。

しかしながら、この議論は(1)や(2)の前には無力であるように思われる。「雨が降る」という事態に関するどんな経験の違いが(1a), (1b), (1c)の違いを生み出すのか。その道筋を描き出すのはほとんど不可能なことに思える(Deutscher 2010: Ch. 6)。(2)に関しても同様である。そうした難題に挑むよりは、Ruwet (1991: Ch. 3)の提案する「降雨という事象では、述語と項を切り分けるのが難しいために、言語間でコード化に違いが生じやすい」という趣旨の説明のほうが理に適っているように思われる。すなわち、降雨が言語間の表現形式の差異を生み出しやすい事象であるということまでは認知的な動機づけによって説明できるが、(1)に見られる差異自体を認知的動機づけに還元することはできない(つまり、現に生じてしまった差異自体にもはや理由はない)ということである。

(2)に見られる代名詞のふるまいの違いに関しては、それでもなお謎が残る。フランス語に関しては、「人称代名詞は既知の要素だから動詞の前に出るのだ」という趣旨の「説明」がなされることが多い(大橋他 1993: Ch. 2)。だが、それならどうしてフランス語の人称代名詞の位置は、時代が下るにつれ、前から後ろ(すなわち、イタリア語と同じ主文動詞の前から、補文動詞の前)に移動してしまったのか。また、イタリア語の人称代名詞はどうして主文動詞の前と補文動詞の後ろという正反対の位置に置かれうるのか。こうした事実を経験によって説明することは絶望的であるように感じられる。

### 3.8. 予測の放棄

「言語は人間の世界認識の反映である」という考え方は、意味こそが文法(形式)を駆動するという考え方を生み出すことがある。

#### 引用 20

多くの人にとって外国語の文法は、覚えなくてはならない規則の体系でしょう。これは20世紀前半の近代言語学の考え方でもありました。しかしこの考え方はまちがっていると思います。文法とは規則の体系ではありません。文法を学ぶことは言語による意味の切り取り方を学ぶことです。(東郷 2011: 3)

東郷(2011)はここで、言語の意味的な動機づけさえ理解すれば、言語の形式的側面は覚えなくてもよいと言っているように見える。

しかしながら、概念化能力が同じであってもそこから生まれる言語体系は異なりうるという前節の議論からは、意味的動機づけが言語形式を決定するわけではないという常識的な(あるいは夢のない)見解が導き出される。

#### 引用 21

意味構造や機能構造は、文法を制約し、動機づけはするが、文法を完全に決定するわけではないことにはほとんどの人が同意するだろう。すなわち、話者は

依然として当該言語の特定のパターンを習得しなければならず、言語学者はそうしたパターンを明示的に記述しなければならないのである。

(Langacker 2008: 6, 拙訳)

李 (2010: 127-128) は、東郷 (2011) よりも慎重に、認知言語学の立場から見ても、「文法は言語事実を一般的に規定する規則の集合からなる」という伝統的な考え方は「決して間違っただけを言っているわけではない」し、「批判の対象ではない」と述べている。同様の観点から、西村 (2013) は、ある言語の文法と語彙が現在もっている構造や特性の多くは (たとえば生成文法家が言うような意味で) 一般原理によって厳密に予測できるものではなく、せいぜいそうであるのが自然である (たとえば意味や談話機能によって動機づけられている) と言えるのみであり、その点で、言語学者の仕事は、ある事件の起こった経緯を資料の精緻な解釈に基づいて跡づける歴史家や、実際に起こった地震の発生のメカニズムを明らかにする地震学者の仕事と似ているとする。優秀な歴史学者でも未来の事件を予測することはできず (また予測する必要もなく)、優秀な地震学者でも地震予知ができない (また予知する必要もない) のと同じで、言語学者の仕事は意味から言語形式を予測することではないのである。

予測可能性を放棄するならば、太陽の色の表現、天候表現 (1)、人称代名詞のふるまい (2) などに関して、「なぜそうなっているのか」を、共時的または通時的に、予測可能性のレベルではなく、動機づけのレベルで解明する、すなわち、そうなっていることがどういう意味で自然であると言えるのかを述べることができればよいことになる (西村 2013)。では、これで前節までの問題が回避されるだろうか。いや、回避されないと思われる。たとえば日本語話者にとって太陽を赤と形容するのが「自然」であり、英語話者にとって太陽をオレンジと形容するのが「自然」であるならば、その「自然」の違いが何に起因するかという問いが浮上する。次の引用 22 のような見解が認知言語学の文献で繰り返し表明されていることを考えるならば、この「自然」の違いが究極的には「捉え方」の違いに還元されると考えるのはごく「自然」なことであるように思われる。

## 引用 22

[...] 言語表現は特定の捉え方と結びついており、その捉え方は当該状況を思い描く無数の方法のうちただ一つを反映している。

(Langacker 2008: 4, 拙訳, 強調は原文による)

それゆえ、予測可能性を放棄してもなお、「日英語の太陽の色の表現の違いには、日英語話者のどんな事態把握の違いが反映されているのか」「英語・フランス語・イタリア語の降雨を表す表現や人称代名詞のふるまいの違いには、これらの言語の話者のどんな事態把握の違いが反映されているのか」という問いからは逃れられない。歴史学者が過去の事件を記述し、地震学者がすでに起きた地震のメカニズムを

説明する責任を負うのと同じく、認知言語学者は、すでに慣習としてできあがっている各言語の言語形式（の違い）の背後にある捉え方（の違い）を記述ないし説明する責任を負うのである。ここで、「現時点ではそれがいかなる捉え方の違いであるかは分からないが、われわれの直観がどうであれ、とにかく言語形式の違いには捉え方の違いが反映されているのだ」などと言えば、「人間によって捉えることのできない（あるいは人間の捉え方とは独立の）捉え方」という正体不明の概念が再浮上する。この正体不明の概念の中身を説明するのは認知言語学者の側の責任にほかならない。かくして、予測可能性を放棄したとしても、前節までの問題はなお追いついてくることになる。

言語形式が「どういう意味で自然であると言えるのかを述べる」のが言語学者の仕事であるとする西村（2013）の見解は、さらに別の問題を提起する。言語表現が当該言語の使用者にとって「自然」なものであるという前提は、言語の「規範性」を蒸発させてしまうように思われるのである。「確かに、われわれの言語実践はわれわれの自然な反応傾向に支えられている。しかし、言語実践を規範的なものとして語る以上、それをたんに自然的なものとして語り出すことは許されない」（野矢 2011: 291）。自分は太陽は黄色だと思う。でも、日本語では「真っ赤な太陽」と言わなければならない。自然と規範とのあいだのこうした緊張関係も、言語の重要な側面であるにちがいない。「ひとり山道を歩いているときに木々を見てその色を『緑』と呼ぶ」ような場合も含め、すべての言語使用は「評価と訂正の可能性に開かれているかぎり、規範的な言語実践にほかならない」（ibid.: 289）。だが、認知言語学の言語観のどこに規範性の住む場所があるのだろうか。

### 3.9. 同一体系内の差異

最後に、本節で検討してきた解決案すべてにさらなる疑問を投げかけるものとして、同一言語体系内の表現形式の差異の問題を取りあげる。認知言語学は、これまで見てきたような異なる言語間の表現形式の差異だけでなく、単一言語内における表現形式の差異も、同一のものや事態に対する捉え方の差異の反映であると考えてきた（池上 1991: Ch. 2, 西村 1998, 2000）。しかし、この想定が、またしても認知言語学の首を絞めることがある。ドイツ語の複数形を例にして、その様子を見てみよう。

ドイツ語の名詞の複数形語尾には5つのパターン（無語尾, -e, -en, -er, -s）があり、そこにウムラウトの有無（-er においてウムラウト可能な母音は必ずウムラウトし、無語尾および -e において母音がウムラウトする場合がある）を重ね合わせるとパターンはさらに増える。これらのパターンのうち特にどれが規則形ということはなく、個々の名詞ごとに複数形が決まっているため、基本的にはただ覚えていくしかない。前節で見たとおり、言語形式は多くの場合予測不可能であるから、ここまでは特に問題にすべきことはない。

この事実と認知言語学とのあいだに緊張関係が生まれるのは、「ドイツ語名詞の

複数形の作り方には、人間のどんな捉え方が反映されているのか」と問われた場合である。これは同一言語体系内の形式の差異であるから、この差異をパラメータの値の差異、文化の差異、概念化能力が生み出した言語体系の差異といったものによって説明することはできない。予測可能性の放棄については、改めて次のことを確認しておく必要がある。確かに、予測可能性が放棄された以上、Hund「犬」の複数形がHundeで、Katze「猫」の複数形がKatzenで、Vogel「鳥」の複数形がVögelで、Huhn「鶏」の複数形がHühnerであるといった事実を予測することはできない。しかし、言語が人間の世界認識の反映であり、引用22にあるように、個々の言語表現に特定の捉え方が結びついているとするならば、これらの複数形の違いにはなんらかの捉え方の違いが反映されていなければならない。予測を放棄することは、捉え方による説明を放棄するための免罪符にはならないのである。

具体的には、次のようなシナリオになるだろう。まず、すべての複数形には複数性概念が結びついている。次に、その下位区分として、それぞれの複数形のパターンには複数性に関する特定の捉え方が結びついている。

#### 引用 23

言語表現の意味とはたんにそれが喚起する概念的 content だけではない。その内容がどのように捉えられているのかも同じく重要である。

(Langacker 2008: 55, 拙訳)

だが、「複数の犬」「複数の猫」「複数の鳥」「複数の鶏」のあいだに、いったいどんな複数性の捉え方の違いがあるのか。他の言語の複数形（たとえば英語ならこれらはすべて -s で表される）に直訳して失われるような意味の違いがそこにあるとは思えない。

#### 4. おわりに

以上の議論から分かるように、「言語は人間の世界認識の反映である」という認知言語学の基本テーゼ自体を哲学的に検討しはじめると、実際の言語分析に入る前に立ち往生してしまう。このテーゼは、それを受け入れることによって何ごとかを具体的に理解することができるような命題ではないのである。ここで二つの可能な選択肢がある。一つはこのテーゼを所与のものとしてとりあえず分析をはじめることであり、もう一つはこのテーゼを全称命題として解釈するのを放棄することである。

第一の選択肢をとるならば、人間の認識が反映されていないように見える表現が見つかったとしても、将来的にはなんらかの動機づけが発見されるという望みのもとに研究を進めることになる。しかし、タコの「手話」にいつの日か意味が見出されるという希望をもつのが難しい（野矢 2011: Ch. 9）と同様に、たとえば英語・フランス語・イタリア語の人称代名詞のふるまいの違いや、ドイツ語の複数形の違いに対応して認識の違いが見出されるという希望をもつのは難しい。無理に認識の

違いを見出そうとすると、Deutscher (2010) で揶揄されているようなかわしい学説を唱えることにもなりかねない。認知言語学が他の理論に比べて初心者にも取っつきやすいという印象を与える (cf. Lee 2001: 2, Langacker 2008: 12) ことを考えるとき、この危惧はいっそう現実味を帯びてくる。ロマンス語の人称代名詞のふるまいや、ドイツ語の複数形は、これらの言語の学習者に新鮮な驚きを与えるものの一つであるから、それらを認知言語学的に分析したい人が出てきてもおかしくはないだろう。それらを認知言語学的に分析するとは、いったい何をどうすることなのか。認知言語学者にはその手法を明確に語る責任がある。さもなければ、「ロマンス語の人称代名詞のふるまいの違いには各言語話者のかくかくの認識の違いが反映されていると思います。—いや、それは認知言語学というものを誤解した考え方です。初心者には分からないでしょうが。」「それならしかじかの認識の違いですか。—いや、それも誤解です。」といった「でもなく、でもない (neither / nor) 方式」(Sokal and Bricmont 1998: Ch. 2) の問答に陥り、認知言語学の営みが秘技のごとき様相を帯びる危険性にさらされることになる。

第二の選択肢をとるならば、認知言語学のテーゼは「言語は人間の世界認識を部分的に反映する」というものになる。これは「われわれの言語体系は、おおむねわれわれの概念体系に対応しているが、なかには概念を直接反映しているとは言えず、それ自体として記憶するしかない言語表現もある」「異なる言語表現が異なる捉え方に対応する場合もあるが、そうではない場合もある」という常識的な言語観にはかならない。この言語観に異議を唱える人はおそらくいないだろう。というのは、この言語観に対するアンチテーゼは「言語は人間の世界認識を部分的にすら反映していない」という経験的に受け入れがたいものでしかないからである。それゆえ、この選択肢のもとでは、認知言語学の独創性は、その言語観にではなく、その分析方法に求められることになる。

ここで浮上するのが、分析対象の選択の問題である。認知言語学の概説には、認知言語学の枠組みでの言語現象の分析の具体例が挙げられており、読者は、それを見て、認知言語学の枠組みで別の言語現象を分析できるようになることが期待されている。その目的を達するには、何が認知言語学の可能な分析対象なのかを判定する方法が確立していなければならない。どの学問にも「よいテーマ」とそうでないテーマとの区別がある。これは当然のことであり、よいテーマを選べるかどうかは研究者個人の能力にかかっている。だが、ここで問題にしているのが、認知言語学における「よい分析対象」の判定基準ではなく、「可能な分析対象」の判定基準であることに注意しなければならない。可能な分析対象とそうでないものを区別する基準を提示するのは認知言語学の教科書の責任であり、新たに認知言語学の営みに参加する人たちの能力だけに任されてよいことではない。さもなければ、またしても「ロマンス語の人称代名詞を認知言語学に分析したいのですが。—いや、だめです。初心者には分からないでしょうが。」「それならドイツ語の複数形を……—いや、だめです。」といった「でもなく、でもない (neither / nor) 方式」の問答に陥ること



になる。

認知言語学が使用依拠モデルに基づくボトムアップ式の理論であることはよく知られている。しかし、可能な研究手法・研究対象と不可能な研究手法・研究対象を区別する基準までボトムアップ式に決めていたのでは、認知言語学の研究と称しながら実は認知言語学の研究ではないような研究が量産されかねない。そうならないためにも、認知言語学の枠組みで何が可能で、何が可能でないかを、認知言語学者自らがトップダウン式に語る事が求められている。Langacker (2008: 12) は、認知言語学が一見簡単な理論に見えるいっぽうで、この枠組みで説得力のある分析を提示するのはむしろ他の枠組みよりも難しいと言う。この難しさは、万人が挑戦することのできる開かれた難しさであるべきであり、秘技のような閉じた難しさであってはならないのである。

### 略号一覧

INF：不定詞

OBJ：直接目的語人称代名詞

3SG：三人称単数

### 参 照 文 献

- Condillac, Étienne Bonnot de (1780) *La logique, ou les premiers développements de l'art de penser*. Paris: L'Esprit et de Bure l'aîné.
- Davidson, Donald. (1984) *Inquiries into truth and interpretation*. Oxford: Clarendon Press. 野本和幸・植木哲也・金子洋之・高橋要 (訳) 『真理と解釈』東京：勁草書房, 1991年.
- Deutscher, Guy (2010) *Through the language glass: Why the world looks different in other languages*. New York: Picador. 棕田直子 (訳) 『言語が違えば世界も違って見えるわけ』東京：インタビュー, 2012年.
- 福井直樹 (2012) 『新・自然科学としての言語学：生成文法とは何か』東京：ちくま学芸文庫.
- 廣瀬幸生 (2007) 「言語が語る意味の世界」, 言語学出版社フォーラム, リレーエッセイ, [http://www.gengosf.com/dir\\_x/](http://www.gengosf.com/dir_x/)
- 池上嘉彦 (1991) 『(英文法) を考える』東京：ちくまライブラリー.
- 池上嘉彦 (2003) 「認知言語学：“紹介”のことば」辻幸夫 (編) 『認知言語学の招待』iii-ix. 東京：大修館書店.
- 今井むつみ (2010) 『ことばと思考』東京：岩波新書.
- 井元秀剛 (2010) 『メンタルスペース理論による日仏英時制研究』東京：ひつじ書房.
- 井上京子 (1998) 『もし「右」や「左」がなかったら：言語人類学への招待』東京：大修館書店.
- 影山太郎 (1999) 『形態論と意味』東京：くろしお出版.
- Lakoff, George (1987) *Women, fire, and dangerous things: What categories reveal about the mind*. Chicago: University of Chicago Press. 池上嘉彦 他 (訳) 『認知意味論：言語から見た人間の心』東京：紀伊国屋書店, 1993年.
- Lakoff, George and Mark Johnson (1980) *Metaphors we live by*. Chicago: University of Chicago Press. 渡部昇一 他 (訳) 『レトリックと人生』東京：大修館書店, 1986年.
- Langacker, Ronald W. (1987) *Foundations of cognitive grammar, Vol 1: Theoretical prerequisites*. Stanford: Stanford University Press.
- Langacker, Ronald W. (1991) *Foundations of cognitive grammar, Vol 2: Descriptive application*. Stanford: Stanford University Press.
- Langacker, Ronald W. (2008) *Cognitive grammar: A basic introduction*. Oxford: Oxford University Press. 山梨正明 (監訳) 『認知文法論序説』東京：研究社, 2011年.

- Lee, David (2001) *Cognitive linguistics: An introduction*. Oxford: Oxford University Press. 宮浦国江(訳)『実例で学ぶ認知言語学』東京:大修館書店, 2006年.
- 李在鎬(2010)『認知言語学への誘い:意味と文法の世界』東京:開拓社.
- 牧野成一(2006)「比喩はおいしいか」, 言語学出版社フォーラム, リレーエッセイ, [http://www.gengosf.com/dir\\_x/](http://www.gengosf.com/dir_x/)
- 守田貴弘(2013)『「フランス語学者」が認知言語学を研究するわけ』日本フランス語学会シンポジウム「認知言語学の功罪」口頭発表, 2013年6月1日, 国際基督教大学.
- 西村義樹(1998)「行為者と使役構文」中右実・西村義樹『構文と事象構造』第II部:107-203. 東京:研究社.
- 西村義樹(2000)「対照研究への認知言語学的アプローチ」坂原茂(編)『認知言語学の発展』145-166. 東京:ひつじ書房.
- 西村義樹(2013)『「英語学者」が認知言語学を研究するわけ』日本フランス語学会シンポジウム「認知言語学の功罪」口頭発表, 2013年6月1日, 国際基督教大学.
- 野村益寛(2003)「認知言語学の史的・理論的背景」辻幸夫(編)『認知言語学の招待』17-61. 東京:大修館書店.
- 野矢茂樹(1995/2012)『心と他者』東京:勁草書房, 1995年, 東京:中公新書, 2012年.
- 野矢茂樹(1999/2010)『哲学・航海日誌』東京:春秋社, 1999年, 東京:中公文庫, 2010年.
- 野矢茂樹(2011)『語りえぬものを語る』東京:講談社.
- 大橋保夫・藤村逸子・春木仁孝・林博司・梶茂樹・宮下明信・長澤宣親・西村淳子・大木充・田口紀子・東郷雄二(1993)『フランス語とはどういう言語か』東京:駿河台出版社.
- 大堀壽夫(2002)『認知言語学』東京:東京大学出版会.
- 大森荘蔵(1981)『流れとよどみ:哲学断章』東京:産業図書.
- Ruwet, Nicolas (1991) *Syntax and human experience*. Chicago: The University of Chicago Press.
- 清野智昭・治山純子(2013)「なんでそうなるの?ドイツ語から見たフランス語の不思議1」『ふらんす』2013年4月号:70-71.
- Sokal, Alan and Jean Bricmont (1998) *Fashionable nonsense*. New York: Picador USA. 田崎清明・大野克嗣・堀茂樹(訳)『「知」の欺瞞:ポストモダン思想における科学の濫用』東京:岩波書店, 2000年.
- 鈴木孝夫(1990)『日本語と外国語』東京:岩波新書.
- Taylor, John R. (2002) *Cognitive grammar*. Oxford: Oxford University Press. 瀬戸賢一(訳)『認知文法のエッセンス』東京:大修館書店, 2008年.
- Taylor, John R. (2003) *Linguistic categorization*. Third edition. Oxford: Oxford University Press. 辻幸夫他(訳)『認知言語学のための14章 第三版』東京:紀伊國屋書店, 2008年.
- 東郷雄二(2011)『中級フランス語 あらわす文法』東京:白水社.
- Wittgenstein, Ludwig (1953) *Philosophische Untersuchungen*. Oxford: Basil Blackwell. 藤本隆志(訳)『哲学探究』(『ウィトゲンシュタイン全集』8), 東京:大修館書店, 1976年.
- 山梨正明(1995)『認知文法論』東京:ひつじ書房.
- 山梨正明(2000)『認知言語学原理』東京:くろしお出版.
- 吉村公宏(2004)『はじめての認知言語学』東京:研究社.

執筆者連絡先:

〒352-8501 埼玉県新座市中野 1-9-6

跡見学園女子大学文学部

madara@tky.3web.ne.jp

[受領日 2013年1月8日]

最終原稿受理日 2013年9月5日]

## Abstract

**Cognitive Linguistics and Philosophy**

TOMOHIRO SAKAI

*Atomi University*

The cognitive claim that language is a reflection of our recognition of the world raises the two following issues: (i) What exactly do we recognize? (ii) Who exactly recognizes the world? Although cognitive linguistics assumes the dualism of outer and inner worlds, i.e. objective and mentally constructed worlds, their arguments fail to follow their assumption. What they claim to be the facts about the world often turns out to be nothing but reflections of our construal of the world. Their argument can then be reformulated in terms of monism. The claim that language is a reflection of our recognition of the world is also at odds with contrastive linguistics. In this framework, differences between languages should be accounted for in terms of differences of the native speakers' recognition of the world, which often leads to the notion of "meaning independent of speakers' recognition", contrary to what is assumed by cognitive linguistics.